

序

日本農芸化学会は、大正 13 年 7 月に設立され、創立 60 周年を記念して昭和 59 年 9 月 19 日に東京において盛大な記念式典が挙行されました。そしてこの機に数々の記念事業が企画され実施されましたが、その一つとして一世紀に及ぶ農芸化学領域の発展とその基盤となった学会活動を年代的に記述して資料として保存し、また今後の発展に資することを目的として農芸化学史の編纂が計画されたのであります。実はこの企画は創立 50 周年の折に故松居宗俊氏（当時の専務理事）を中心に検討され、一部資料の収集にも着手されたのであります。なかなかの難事業のため思うように進捗せず遂に今日に至ったものであります。このたびは神立誠氏を委員長に 13 名の委員から成る農芸化学史編纂委員会が設置され、委員諸氏の並々ならぬ御尽力ならびに多数の会員諸氏の御協力によりようやく「農芸化学の 100 年」を刊行し、農芸化学会誌の臨時増刊号として全会員に配布できる運びに至りましたことは誠に欣快に堪えません。

わが国の大学に農芸化学科が設置されたのは明治 26 年（1893 年）のことです。当時はケルネル、ロイブラの外人教師や古在由直先生らを中心とした教授陣により教育、研究が行われ、高等植物や微生物の生理化学のほか、家畜飼養学などが農芸化学の主体をなしておりましたが、ここから桑萎縮病や清酒醸造菌類などの勝れた研究が生まれてきました。今日の農芸化学が一次から二次にわたる広範な生物生産の領域において世界に類をみない独自の学問体系を作り上げてきたルーツをここにみるることができます。爾来今日に至るまで 100 年近く農芸化学では専ら生命現象の秩序と制御機構を解析する基礎的学術研究を進めるとともに、生物がもつ機能を有効に利用し、人類の福祉に役立てる応用科学技術の開発に多大の努力と貢献を果たしてまいりました。近年バイオサイエンスやバイオテクノロジーの分野における進展は目ざましいものがありますが、生物による、あるいは生物の生産および利用を目的として、基礎・応用の両分野において長い歴史と輝やかな伝統をもつわが農芸化学がその中核をなす専門分野として世間の注目を浴びているのもっともなことといえましょう。現在私たちは食糧、資源、エネルギー、環境などの重要課題に直面しておりますが、とりわけ有限の化石資源への依存を脱却して再生可能な生物資源の活用を計ることは 21 世紀に向けての最大課題であり、農芸化学が果たすべき役割は誠に重かつ大であるといえましょう。かかる時機に農芸化学 100 年の歴史をふりかえり、その間の各専門分野の進展が描写された本史が刊行されたことは真に意義深いものがあります。会員諸氏が本史を繙かれ、わが農芸化学 100 年のその時々々の足取りを想起し、21 世紀に向けての一里塚として活用していただければ誠に幸甚に存じます。また本史が私たちの世代から後世に伝える重要な資料文献として今後長年にわたり各方面で有意義に利用されることを念願するものであります。終りに本史編纂に参画された神立誠委員長をはじめ各編纂委員、各専門分野の進展史を執筆していただいた諸氏、さらには熱心に御協力いただいた多数の会員諸氏に深く感謝の意を表します。